



郷土史

# ていね

第 58 号

平成 24 年 10 月 10 日

手稲郷土史研究会会報

第 77 回（平成 24 年 9 月 12 日）定例会の講演要旨

## 石狩尚古社と井上传蔵について

石狩尚古社館長 中島 勝久氏

### ～私設資料館 石狩尚古社の成り立ち～

石狩尚古社というのは俳句結社だったが、これを担ったのが中島呉服店の人々だった。

その呉服店を開いた中島伍作という人は、明治 2 年に佐渡から北海道へ単身で小樽に来た人で荒物業を営んだ後、サケ漁で賑う石狩に来た。ところが 14 年に病死をして長男が 11 歳で家督を継いだ、その時の財産が数万円あった。

尚古社には明治 8 年頃に、やはり佐渡から来て中島呉服店の番頭をしていた鎌田池菱という人がいた。その人が俳句でとりわけ活躍した。



明治 35 年に尚古社で『尚古集』というものを出版しているが、石狩に文学は無いと言われていたが、こんな立派なものを出していた。この時に全国から句が来ている。これを見て残さなければならないと思って家にあった俳句、書画に加えて食器等も含めて尚古社として展示する私設資料館を平成元年に建てることにした。これらの書の中には吉田松陰、山岡鉄舟、勝海舟などの書もある。

尚古社は安政 3 年(1856 年)に創設されたが、住職、学校の校長、神主などの石狩の文壇の名士ばかりが集まっていた。尚古というのは、昔の歴史、文化を尊ぶという意味で、俳句の世界では松尾芭蕉の俳句を継承するということだと思っている。事実、芭蕉の句を掲げて、句会を行っていたようだ。

### ～石狩の俳人・鎌田 池菱について～

私は平成 7 年に『鎌田池菱と尚古社』という本を出したが、この時鎌田池菱という人を調べたが、代々、佐渡の長谷寺の執事をして俳句もしていた人で鎌田幹六という人だった。6 男ではなく次男だったので、跡継ぎでもないのに、北海道に渡ってきて同郷の石狩の中島呉服店の番頭になった。

池菱は、万延元年(1860 年)生まれだが、正岡子規が出る前の明治 13～23 年頃まで青年時代の作った俳句を載せた『澄月園 池菱 青年時代の俳句』(中島勝久編)が平成 17 年に出されたが、俳人として相当な人だった。

京都、大阪などに買い付けで回った後、俳句でずっと各地を回ったようだ。

明治 39 年に大阪で出した俳句の番付があったが、その中に石狩の池菱の名が出ている。俳句を商売にしている人もいたが、池菱はそんなことはしていなかった。

明治 40 年代になっても、正岡子規たちとは一線を画して尾崎紅葉とか児童文学者でもある巖谷小波などが石狩の俳句の選者になってくれた。

### ～石狩の名士・井上传蔵について～

秩父事件の井上传蔵も石狩尚古社と関わりがあって入っていたが、それは俳句がすごかったからだ。伝蔵は、仙台から青森、室蘭、苫小牧を経て明治 21 年に、札幌に来て手稲の村上藤吉の世話になったようだ。

それからその秋に石狩の八幡神社を頼りにして来た。24 年に香典帳に、伊藤房次郎という名で香典を出している。25 年に石狩の分部越というところに土地 16 町の貸付を受けている。ところが払い下げを受けて登記するにしても戸籍が無いため諦めざるを得なかった。またその 25 年には、高浜みきさんと結婚もしている。翌年に長男が生まれている。だけど秩父に本妻がいたので、籍を入れられなかった。

その後、5 人も子供が産まれた。教育熱心な人だった。

35 年に尚古社の句集が出されたが、伝蔵の句が掲載されている。その直筆の句も残っている。その句の内容を巡っている解釈されているようだ。

石狩では、伝蔵は活躍した名士だった。祭儀委員長、保証人などもやっていた。26 年頃、300 人ほどの人の中で演説もしている。死ぬときは、死刑になっていることは判っていたが、恩赦になっていたことは知らなかったようだ。

(裏面に続く)

## 「小さい頃の軽川」について

手稲本町 濱谷 義昭 氏

- ・ 日石の製油所が爆撃されたときに、兄と村田銃を持って牛舎の屋根に上っていたが、その後、一ノ宮さんの防空壕に非難した記憶が薄っすらと残っている。家の田圃（今の溪仁会病院辺り）にあった直径 30cm 位の爆弾の破片を拾ってきて、家に保管してあったが、今は所在不明。
- ・ 明治 13 年 4 月 25 日、軽川から用水路を掘った記録がある。生活のすべては、その用水路の水に頼っており、近隣の農家の水田の水はすべて軽川から引いていた。
- ・ 冬季間は、三菱や王子から山の木を払下げてもらって、春先の堅雪になる直前に伐採し、それを下ろしてきて、その木を各戸の私道上に雪が溶けるまで並べておいた。これを農作業の合間を縫ってその木を小さく切り、売っていたようである。一部は、自分の家の燃料として使っていた。また、燃料としては、泥炭地の泥炭を掘って、乾燥させたものも使っていた。
- ・ 今の五号線沿いにある消防署付近は、粘土地で耕作用土として適していたので、客土していた。そこでは、六方石が沢山出土した。当時、軽川にいたカワセミは、この粘土地に穴を掘って巣を作っていた。
- ・ 父たちが手稲山で熊を捕えたこともあった。
- ・ 昭和 31 年頃、手稲山にアンテナ設置のための山道がつけられた。学生の頃、雪上車（HBC 中継所の好意）に乗せてもらって登り、その跡をスキーで滑降するという経験をさせてもらったこともある。その後、そこにオリンピアができた。聖火台の下に池があり、コイやニジマスなどが放されていたが、大雨で決壊してその池はなくなった。
- ・ 遊園地が出来た頃、手稲山にはミズバショウがない（実状は手稲山にミズバショウが方々にある）ので、遊園地にミズバショウを植えてほしいと所長の従兄から頼まれて、家の近くから移植したことがあった。
- ・ 手稲の森のヒュッテ小屋から入ったところにある沢にはザルガニが沢山いた。今は草木が茂って入ることが難しいが、その沢で、大きな石英とか黄銅鉱などを見た記憶がある。
- ・ ネオバラ（八百高地、第二手稲とも言う）の西の斜面に人口の四角い排水溝のようなものがある。70m×40m の広さのもであり、何に使われていたものかわからない。
- ・ 元、王子に働いていた人が、風雪孔（冷たい風が出て来る穴）のことを話していたのですが、そこを捜し当てたいと考えている。
- ・ 去年、私たちの会で夏山納めと称して 10 月、数人で 3 台の車に分乗して、ヒュッテ小屋に向かったときのこと、軽川の横、手稲山西線を登っていて、稲雲高校から 400、500m 登ったところで、熊に遭遇した。手稲山を散策するときには熊に要注意である。



（記録：小田）

（表面より）

石狩では、俳句をしたり小間物屋をしたりして 23 年間も暮らしていた。45 年に石狩から札幌に行ったが何故、石狩を去ったかは判らないが、大通りでは 1 年間、旅館業をしたようだ。

### 次回の予定

次回（11 月 14 日）は、澤本富延会員の「生まれ育った樺太での体験～平成 24 年 7 月、サハリン視察報告記～」と土谷聖史会員の「テイネの地をたずねて～西野の地名と方位感覚～」の 2 つの発表を予定しております。

会場は、視聴覚室です。

ところが、その後、野付牛（現北見市）に行ったが、向こうでは歳をとってため俳句などもやっていなく、ほとんど記録に残っていない。死ぬとき家族と写真を写しているが、死ぬ前にあちらの籍を抜いてこちらの人と結婚して高浜の姓から井上姓にしている。

その葬儀委員長は、石狩尚古社の俳句の仲間がしている。

最後まで隠し通せたようだ。子供たちには後はちゃんと尽くせと言い残して亡くなった。

（文責 村元健治）